

「子どものあとに

ついていく保育」とは？

黒田 成子

昨年筆者の関係しているM園で長年つづけてきた遊びのカリキュラムについて、その実践報告ともいえる小冊誌をまとめた。皆でその題名を考えていた時、一人の教諭が「あとについていく……」はどうかとつぶやいた。そこから始まり、長い話し合いの末、けっきょく「子どものあとについていく保育」という題におさまった。聞きなれない題名ではあるが、遊びを中心とする小園の保育観が表れている感じもして、皆で何となく気に入っていた。

ところが日を経るにつれ、これは大変な題名をつけたものだと考え込むようになった。わたし達はゆ

めゆめ子どもがやりたい放題のことをするにまかせ、そのあとを保育者がついていくという単純な発想をしていたわけではなかった。

しかし、かりに十年、二十年前の保育を省み、遊びの保育がかなり進んできた近年においても、子どもに則し過ぎることがあったのではないかと反省している。出来あがった小冊誌について何人かの方から題名の「子どものあとについていく保育」の真意を問われた。また、いつも助言を頂いているO教授からは「ほんとうの教育とは……同時に両端的、両面的でなければならぬ……」というフレーベルの言葉を引用して、考えさせられるコメントをいただいた。

そこで久々にフレーベルを思い出し、彼の名著『人間の教育』<sup>へんぎょう</sup>をとり出してみた。且てはその難解な文章に辟易したもののだが、今は現場の子どもたちの姿を思い浮かべながら、いつのまにか読み耽ける

日々がつづいた。

フレーベルの「……教育はすなわち与え、かつ取る……命令しかつ追隨する、能動的であり、かつ受動的である……」のことはいかにも教育の両面性を並列的に強調しているような感じにとられ易い。

しかし他のところでは教育は「規定的、命令的であるよりも、遙かに多く受動的、追隨的でないならばならない」(『人間の教育』荒井武訳 岩波書店)と述べている。彼は子どもの本性が正しく發揮されるためには命令的教育を少しは認めていると思われる。たとえ子どもに命令的なことばをかけるにしても、両面的であるということは子どもが内面的方向から見られていることが前提にあつて初めて考えられることだろう。

フレーベルは次の二つの場合には命令的、干渉的教育の必要を認めている。すなわち、明晰な思想や2×2=4というような法則的な真理、あるいは永

い間社会の中で承認されてきた道德的また文化的なものに関する問題がおきた場合のみである。

そこで本園のコーナー保育のことを思い出した。

コーナーは子どもが主役となつて自分から出てきた考えで過ごせる場である。このような環境で子どもたちは様々な経験をくり返しつつ精いっぱい生きていく。保育者は子どもを尊重しながら一人ひとりとしてとばを交わし、楽しんだり、たしなめたり、見守りつつ共に育つ。この全面的な受容があり、さらに濃やかな援助があれば子どもたちの育ちはいっそう高められていく。このようなコーナー保育でこそ両面性の保育が可能ではないかと思う。それには当然意識的かつ柔軟なカリキュラムが必要である。

「子どものあとについていく保育」は両端的教育へのより深い問いをもつて、新しい課題としてわれわれの前におかれていることをあらためて感じた。

(相愛学園)